

『法華經』仏身觀の構造について

金 栄 生

諸仏同道としての一乗開顯

『法華經』の方便品を中心とする第一類は、教説の全てが諸仏と表現される多数の仏と積尊との關係を明かすことによつて展開されている。すなわち、方便品の冒頭には、

「シャーリプトラよ、正しくさつたかた、尊敬されるべきかたである如来たちは、深遠で究めがたく、悟りがたい仏陀の知をさつているのであり、(その知は)すべての声聞や独覺たちにとつては、知ることの困難なものである。『シャーリプトラよ、如来こそが説くのであり、あらゆる法をすべて如来のみが知るのである。』⁽¹⁾

と説いて、諸仏との關係の上で積尊と教法の偉大さを強調し、同時に諸仏の中での積尊の位置づけを図っている。また、方便品のキーワードにもなっている「如来の一大事因縁」(tatāgatasyaika-kṛtya eka-karaṇīya mahā-kṛtya mahā-karaṇīya) という言葉をもつて、積尊の世に現れる因縁を明かし、それによつて、積尊の教えは時間と空間の制約を越えた普遍

性を持つ教法であることを表明している。

さらに、方便品の中心理念である三乘方便・一乘眞実の教法は、これが諸仏の共通した教えであることを数度強調し、いわゆる五仏章と知られている所には、一乗の法が諸仏・過去仏・未來仏・現在仏そして積尊によつて、同じく説かれたことであると説いている。このように方便品の教説は、積尊と教法の權威を、もつぱら諸仏との關係を明かすことによつて確實にしている。

方便品において、諸仏と積尊との同質性を表す言葉は誓願(praṇidāna)である。すなわち、積尊は舍利弗に向かつて、積尊の誓願は衆生をして仏になるようにすることであると語っているが、この積尊の誓願は、また諸仏の誓願としても説かれているのである。⁽²⁾ 積尊と諸仏の誓願は、衆生を一乗の教法によつて成仏へと導くことであり、それは衆生に対する大慈悲心の現れとして、積尊と諸仏は救済者としての力用をもつてお互いに関係づけられる。⁽³⁾

要するに、『法華經』の第一類、特にその中心である方便品においては、釈尊による一乘開顯を諸仏との関係の上で示し、その法の普遍妥当であることを三世諸仏の權威をもってアピールしている。これは、第二類において大展開を見せる『法華經』の仏身觀が、すでに第一類にその基本的理念を示しており、それは以上述べたように、諸仏と釈尊との関係のなかで、誓願と法を媒介にして示されているのである。

久遠本仏と釈尊

寿量品は、前の涌出品における、仏滅後『法華經』の弘經を担う存在として地下から涌出した無数の菩薩が、元々は釈尊が成仏以来教化した者であるという釈尊の言葉に対して、弥勒等が起こした疑問に答えるところから話が始まる。すなわち、釈尊は久遠劫以前に成仏して、以来この娑婆世界に常住 (sada-sthita) して不滅 (apanirvita) であるが、顛倒の想 (viparia-sanjñā) をする衆生を教化 (vinyaya) するために、方便として涅槃を示すのみと語る。さらにその長遠なる仏の壽命を五百億塵点劫の譬喩をもつて示し、方便としての仏の涅槃示現を良医の譬喩で説明している。寿量品の教説によると、限られた壽命を持つて娑婆世界に誕生し、衆生に説法教化する釈尊は方便の身であり、それは壽命無量 (apamāṇāyus-praṇāna) ・常住不滅なる本仏の垂迹の身ということである。

『法華經』仏身觀の構造について (金)

『法華經』には、すでに第一類の数か所において、衆生が仏に会うことの難しさを繰り替えし説いている。このような教説は、『法華經』所説の教法の偉大さ、そしてそれを説く仏の偉大さを表すと共に、その法と仏に対する畏敬の心をもたらすための表現であると思われるが、いまこの寿量品においては、仏の常住を説いて衆生の仏への渴望を一気に解消し、衆生が抱いていた無仏悪世への不安も、すべて仏が方便として造成したという説相をとつている。

寿量品の仏身觀を表す經文の一つとして注目されるのが、
「しかも、良家の子らよ、そのあいだに私は、ディーパンカラ (燃燈) 如来をはじめとする、正しい悟りを得た尊敬さるべき如来たちをほめ讃えて説き、それら正しいさとりを得た尊敬さるべき如来たちが完全な涅槃にはいること (も説いた) が、(それは真実の涅槃ではなく) 良家の子らよ、私が巧みな方便をもって説法を完了するためにつくり出し (て説いた) たものである。」⁽⁴⁾

の一文である。これは『法華經』の結集者たちが、すでに釈尊の在世当時から存在していた過去仏思想を肯定し、そのうえで釈尊の方便現涅槃と同じように過去仏の涅槃に対しても、それが衆生を教化するための方便であると説いて、第一類で見たような釈尊と諸仏との関係づけの完成を図っていると思われる。ここでの釈尊と諸仏との根底に流れる同質性とは、初期仏教以来の法身の觀念に他ならない。寿量品のこの一文

『法華經』仏身觀の構造について(金)

については、積尊と諸仏との関係における本地と垂迹を表すとの見方が可能である。しかし、これは本仏としての法身を根本とした、積尊と諸仏の応現と涅槃を説いたものであり、そうした側面からの積尊と諸仏との関係を表していると思われるべきである。寿量品は積尊の久遠成仏・常住不滅と方便としての涅槃示現を説いているが、それは三世諸仏の場合にも同じである。見宝塔品の十方分身諸仏説のように、空間的面において、積尊が諸仏の本地仏であることを認める經文を除いては、三世の諸仏を積尊の化現であるとか、あるいは積尊を唯一の仏とはいっていないのである。

常不輕菩薩品には、過去に常不輕菩薩が、日月燈明仏と雲自在王仏⁽⁵⁾をはじめ多くの仏を親見し、四衆のために『法華經』を説いたことをいうが、積尊は、その時の常不輕菩薩は積尊自身であると説いている。若し、寿量品の教説が、諸仏の唯一本仏である積尊への帰一を説いていると解釈すれば、それは常不輕菩薩品の所説とは矛盾するし、一方では第一類の化城喻品と授学無学人記品に説く過去世の因縁とも矛盾することになって、これらの教説が『法華經』に存する意義自体が無視される結果になりかねない。

まとめ

『法華經』における仏身の觀念は、三世諸仏と積尊との関

係において、誓願と法を媒介にして展開され、ついに寿量品では、寿命無量・常住不滅の本仏とその応現の迹仏という二身説的構造をもつて独特な結論を出している。ここでの本仏とは法身仏と見るべきで、迹仏は三世諸仏および積尊である。しかしながら、この両者は別の身ではなく、本仏は迹仏と根本において一つであり、その意味から法身仏・積尊・諸仏は一即一切であり一切即一の関係にあるのである。

1 Wogihara. p. 282 ~ p. 294 (和訳は、松濤誠廉外訳『大乘仏典』第四・五卷の当該部分を引用した。) 大正九、五中下。

2 Wogihara. p. 447 ~ 14. 大正九、八中。

3 Wogihara. p. 51.6 ~ 9. 大正九、九中。

4 Wogihara. p. 270.6 ~ 10. 大正九、四二中下。

5 大正九、五一上。梵本には、Candrasvarāja等、三人の仏の名が語られ、妙本・正本とは一致しない。Wogihara. p. 321.26 ~ p. 322.4.

〈キーワード〉 仏身觀、積尊、諸仏、本仏、迹仏

(大正大学大学院修了)